

薬用植物園かわらばん

皆さ〜んちょっと覗いてみませんか？
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・・



2019年
6月3日
第66号

カラスビシャク（サトイモ科）

今、第一圃場で、サトイモ科特有の緑色の仏炎包に包まれた姿が見られます。日本各地のほか、朝鮮半島、台湾に分布し畑地や路傍などに生える多年草です。葉が変形した仏炎包の形から「烏柄杓」の名があります。ムチ状に長く伸びてるのは肉穂花序の雄花の先端です。秋に直径約1センチの球茎を掘りとり、外皮を除いて乾燥させたものが、生薬ハンゲ（半夏）です。胸元のつまりを取る目的で、半夏厚朴湯や半夏瀉心湯などの処方に配合されます。生のハンゲを食した時に生じる独特な刺激痛は、シュウ酸カルシウムとタンパク質の共晶の束が、喉の粘膜に接着して生じます。その共晶は、煎じる過程で分解しますので、漢方湯液ではえぐ味はありません。



センダン（センダン科）

温室の横にセンダンが沢山の花を付けています。古名は「あふち（おうち）」と言われてました。日本のほか、アジア各地に分布しています。樹皮が生薬の苦楝皮（クレンピ）となり、民間薬として虫下し（駆虫剤）に、秋に収穫される果実の果肉は、生薬の苦楝子（クレンシ）となり、外用の民間薬としてひびやしもやけに対して用いられます。また、材は家具材などに用いられます。「梅檀（せんだん）は双葉より芳（かんば）し」の梅檀は、このセンダンではなく、インド原産のビャクダン（白檀、ビャクダン科）のことです。白檀の材は芳香を放しますが、センダンは香りません。花にはほのかな香りが漂いますが。

今、こんな草木が楽しめます！！